**つの樺の物語**

樺の木は、世界中の涼しい北部の気候でよく見られます。北アルプスでは、シラカバとダケカンバの2種類の樺が有名です。それぞれが生息する標高がほとんど重ならないため、樺が天然の高度計の役割を果たしています。乗鞍岳山頂への曲がりくねった林道をバスで走っていると、標高1,500m付近まではシラカバの特徴的な淡い灰色の幹が見られ、そこから1,500mから2,500mにかけては、ダケカンバのピンクがかった茶色の幹に変わっていきます。

近くで見ると、他の特徴がこの2つの種を区別しています。樹皮の色の違いだけでなく、葉の形にも特徴があります。シラカバの葉は三角形で底が平らであり、葉脈は5〜8対あります。ダケカンバの葉はわずかに細長くスペードの形をしており、7〜12対の葉脈があります。シラカバの枝は幹から斜め上に伸びますが、ダケカンバの枝は約90度の角度で伸びます。どちらも樹皮は紙のように剥がれますが、成熟したダケカンバの方がより多く剥がれます。

白樺の木は、日本の文化において特別な関係があります。桜は新しい生命を象徴し、ときには無常の哀愁を帯び、真っ赤なカエデは秋の燃えるような儚い美しさを連想させ、白樺の木は高原のレジャーをイメージさせます。樺は、歴史的には高原の高級リゾート地のイメージが強く、第二次世界大戦後、山でのアウトドアレジャーが一般にも普及した時代を思い起こさせます。